報 告

N・G・コンドソプロス博士の訪日と現代ギリシア語方言セミナー

橘　孝司

1992年7月13日、梅雨の長り空とうだるような暑さの中、現代ギリシア方言学の第一人者ニコラオス・G・コンドソプロス博士(Νικόλαος Γ.Κοντοσόπουλος)が広島を訪問された。博士は特に日本に関心を持っておられ、14年前にも東京から大阪まで回られたことがあるが、今回は東京、大阪で旧知の方々に再会された後、京都、広島、福岡まで足をのばされた。

博士は特にクレータ方言を専門にしておられ、1969年に『クレータ方言の言語地理学的研究』(*Γλωσσογεωγραφικαί Διερευνήσεις εις την Κρητικήν Διάλεκτον*)で博士号を受与された。1956年からアテネ・アカデミー現代ギリシア語歴史辞書編纂センター(*Κέντρο Συντάξεως του Ιστορικού Λεξικού της Νέας Ελληνικής Γλώσσης, Ακαδημία Αθηνών*)で辞書編纂に従事、1989年以降は同センターの編集長を務められ、1991年に退職された。言語地理学に関する膨大な論文の他に『ギリシア語におけるフランス語の影響』(*L'influence du français sur le grec*.1978. Athènes)、『現代ギリシア語の方言と準方言』(*Διάλεκτοι και Ιδιώματα της Νέας Ελληνικής*. 1981.Αθήνα)、『クレータ言語地図』(*Γλωσσικός Άτλας της Κρήτης*. 1988. Πανεπιστημιακές Εκδόσεις Κρήτης)の三つの著書があり、現在前者の改訂第二版を準備中とのことである。

今回は観光で来られたのだが、我々にとって、非常に貴重な機会なので、特にお願いして広島大学文学部言語学研究室で、現代ギリシア語方言に関する小さなセミナーをして頂いた。研究室に属する教官・大学院生10名が参加し、二時間半にわたって、現代ギリシア方言の概略、研究の現状を懇切に解説してくださった。博士はこのセミナーのために、予めレジュメを送って下さったが、非常に分かりやすくまとめておられるので、以下に和訳を掲載しておく。

「ギリシア語は歴史上ギリシアに属する地域の住民により、四千年以上にわたって話されている。この言語の形態は紀元前約1700年に遡り得る、いわ

ゆる線文字A(*)のテキストの時期から知られている。これに続く、ギリシア語による最初の文学テキストはホメロスの叙事詩、イリアスとオデュッセイアである。これらの叙事詩は雑多な要素を含む、部分的に人工的な言語で書かれている。

歴史時代のギリシア語史には次の現象が見られる。すなわち、諸方言への分岐の時代とそれに続くコイネー・ギリシア語の形成期。かくして、観察されるのは、古代語方言グループ（ドーリス方言、アイオリス・アカイア方言、イオニア・アッティカ方言）、ヘレニズム（ もしくはアレクサンドリア）・コイネー、現代ギリシア語諸方言への分岐、現代ギリシア語・コイネー（共通現代ギリシア語）の成立である。現代ギリシア語方言の形成は12世紀頃から始まったようである。

もう一つのギリシア語の特徴として、二重言語使用（διγλωσσία）が挙げられる。すなわち、二つの平行する言語、もしくは文体－文人語と民衆語が共存していることである。この二重性はすでに古代（古典期）に存在していたが、ヘレニズム時代に強まり、中世（ビザンツ期）以降もとりわけ教会の伝統を通じて存続し、今日まで純正語（Καθαρεύουσα）と民衆語（Δημοτική）という二タイプ、及び各々の支持者間の対立という形で残存している。

現代ギリシア語諸方言は発生的にも、発展的にも、地理的にも古代ギリシア語諸方言の連続したものではない。ただし、唯一の例外として、ツァコニア方言が挙げられる。これ以外の全ての方言は、ヘレニズム・コイネー（アレクサンダー大王の後継者の時期のギリシア全体の共通語）が、様々なギリシア語地域において、通時的発展により得るに至った形態に過ぎない。現代ギリシア語方言の中、二つが、ルネサンス期から17世紀までに書かれた文学語の記録を残している。すなわち、キプロス方言とクレータ方言である。キプロス方言は散文及び韻文作品、クレータ方言は韻文の作品が残されている。ドデカニサ諸島や、後には、エプタニサ諸島においても多くの方言要素を含んだ韻文作品が存する。

完全な意味での方言（διάλεκτοι）－すなわち普通のギリシア人の聞き手には理解できない形態は、ツァコニア方言、ポンドス方言、カッパドキア方言、南イタリアの方言のただ四つである。このうち最後の三つは外国語（ポンドス、カッパドキア方言はトルコ語、南イタリア方言はイタリア語）の影響を相当受けて変化するに至っている。他の全てのギリシア語の地域的諸タイプは、多かれ少なかれ相互に理解し合うことが出来、普通のギリシア人が聞いても分かるような準方言（ιδιώματα）である。クレータ方言とキプロス方言とは方言と準方言との中間に位置する。従って、その方言の話者でなければ、

理解することが幾分難しい。

現代ギリシア語方言は、相互に、また共通現代ギリシア語（アテネ市で共通語として話されているタイプ）に対して音韻的、形態的、統語的、語彙的な相違点を示すが、これまで、二種類の分類が提唱されている。一つは音韻論上の等語線に基づくもの（G・ハツィザキス(Γ.Χατζιδάκης)による北方語群と南方語群の分類で、一般的に現代ギリシア方言学界で受け入れられている。）であり、もう一つは語彙上の現象に基づいたもの（筆者によって提唱されたもので、疑問詞にτί [ti] を使用する語群と εἶντα ['inda] とを使用する語群の分類）である。他にも幾つかの等語線がM・トリアンダフィリディス(Μ.Τριανταφυλλίδης) によって提唱されている。いくつかの準方言はかなり研究されている一方で、他のものは専門家による調査が全くなされていない。ギリシアの言語地図はいまだ存在しない。筆者はクレータ方言地図を発表し、目下、他の専門家と共にマケドニアの言語地図を準備中である。

現代ギリシア語方言と準方言は消失の一歩手前にある。多くのものが消え去り、あるいは今にも消えようとしている。他のものは都市の共通語の影響の下で恐ろしく変容している。数十年前に記録された材料に基づいてであるにせよ、これらの（準）方言研究の重要さは明らかである。それらは保守的で古風な語彙的、形態的要素を有するゆえに、現代ギリシア語の歴史を解明するのに役立ち、他方で、その音韻上の革新現象は、現代ギリシア語の発展を明らかにすると共に、共通現代ギリシア語が、もし擬古体、すなわち純正語の影響を受けることがなかったならば、どの様な姿であったのかをある程度示してくれる。」

以上のアウトラインに加えて、ご自身の研究から興味深い数々の事例を示して下さった。

例えば、博士御自身による上述の τί 方言群・ εἶντα 方言群（または大陸方言群・島嶼方言群）の二大分類は、民族舞踊、民族衣装といった文化的違いにも対応している。例えば、τί 方言ではクラリネットと太鼓を使用し、楽師はギプシーが務め、輪になって踊るのに対し、εἶντα 方言では、弦楽器（リラ λύρα ）を用い、演奏するのも土地の人、輪舞もあるが、一対一のペアーで踊るタイプが主。τί 方言ではフスタネーラ φουστανέλα（男性用の短いスカート）、ツァルーヒア τσαρούχια （爪先に房のついた靴）を身につけるのに対し、εἶντα 方言ではヴラーカ βράκα （ゆったりしたズボン）、ブーツを着用。（これらについては "La Grèce du τί et la Grèce du εἶντα." *Glossologia* 2-3,1983-84,pp.149-166.で論じられている。）

また、「七面鳥」を示す語彙についての観察も面白いものであった。元来

北米から伝わった外来の鳥であるためにその名称も様々であり、共通ギリシア語 γάλλος に対し、各地方で種々の形態が見られる。διάνος(<ινδιάνος)、κούβος(<Cuba)、μισίρ(<トルコ語 Mısır= Egypt)など。いずれも、どの異国からこの鳥が伝わったと信じられていたのかを示している。(詳細は、"Οι ονομασίες του πτηνού <ινδική όρνις>, κν. γάλλος στον ελληνικό χώρο." Δεξικογραφικόν Δελτίον 17,pp.5-12.)

聴講者側からは、古浦敏生氏(イタリア語)が、南イタリアのギリシア語方言の起源に関して、また高永茂氏(日本語・社会言語学)が、方言と準方言の中間に分類されるクレタ方言とキプロス方言との間の差異について質問し、博士はいずれの質問にも非常に詳しく(古浦氏に対しては流暢なイタリア語で)回答された。

セミナーの後では、ささやかな歓迎会を催したが、A Rome il faut vivre comme à Rome がモットーの博士は、箸を巧みに操りながら、 そばや刺身を美味しそうに食べておられた。広島には一週間ほど滞在され、原爆ドーム、平和記念館、厳島神社等を巡られた。好奇心旺盛な博士は、どこへ行かれても、日本文化に関して種々の質問をされ、こちらが充分に答えられずに困ってしまうほどだった。今回の旅行では、晴天の日に一日も巡り会わない、と苦笑しておられたが、最終日、梅雨の間のぎらつく太陽の中を、新幹線で広島を去って行かれた。

(*)線文字A はその言語的帰属が証明されていないが、博士によれば、1991年クレータ島レシムノンで開かれたクレータ学会議で Paul Faure 教授が印欧語源のギリシア語彙とのいくつかの対応例を発表したとのことである。